

I 調査の概要

1 調査の目的

本調査は、学校における幼児、児童及び生徒の発育及び健康の状態を明らかにし、学校保健行政上の基礎資料を得ることを目的とする。

2 調査の範囲・対象

- (1) 調査の範囲は、幼稚園（幼保連携型認定こども園を含む。以下同じ。）、小学校、中学校及び高等学校のうち、文部科学大臣があらかじめ指定する学校（以下「調査実施校」という。）とする。
- (2) 調査の対象は、調査実施校に在籍する5歳から17歳（平成28年4月1日現在の満年齢）までの幼児、児童及び生徒（以下「調査実施校在籍者」という。）である。
- (3) 本調査においては、以下のとおり、掲載項目ごとに調査対象者が異なる。
 - ① 発育状態（2～7頁）：調査実施校在籍者のうち年齢別男女別に抽出された者
 - ② 健康状態（8～13頁）：調査実施校在籍者全員
 - ③ 肥満傾向児及び痩身傾向児の出現率（14、15頁）：①に同じ

調査対象者数（福島県）

区分	県内の学校数 (校、園)	調査実施校数 (校)	県内学校の在籍者数 A (人)	発育状態調査対象者数 B (人)	抽出率 B/A (%)	健康状態調査対象者数 C (人)	抽出率 C/A (%)
幼稚園	348	37	9,910	1,432	14.5	2,120	21.4
小学校	461	60	93,675	5,386	5.7	23,030	24.6
中学校	232	40	53,377	4,337	8.1	15,538	29.1
高等学校	112	31	53,279	2,701	5.1	22,169	41.6
計	1,153	168	210,241	13,856	6.6	62,857	29.9

(注) 1 幼稚園の在籍者数は、5歳児のみ的人数である。

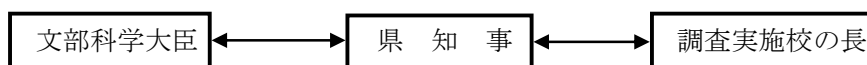
2 発育状態調査は、調査実施校在籍者のうち年齢別男女別に抽出された者を対象とし、健康状態調査は、調査実施校在籍者全員を対象とする。

3 調査事項

- (1) 発育状態調査（身長、体重）
- (2) 健康状態調査（栄養状態、せき柱・胸郭・四肢の疾病・異常の有無、視力、聴力、眼の疾病・異常の有無、耳鼻咽喉頭疾患・皮膚疾患の有無、歯・口腔の疾病・異常の有無、結核の有無、結核に関する検診の結果、心臓の疾病・異常の有無、尿及びその他の疾病・異常の有無）

4 調査の方法

- (1) 本調査は、平成28年4月1日から6月30日の間に実施された学校保健安全法による健康診断の結果に基づき調査した。
- (2) 調査系統は、次のとおりである。



5 本年度調査の変更点

- (1) 健康状態調査項目「せき柱・胸郭」に「四肢の状態」を追加
- (2) 発育状態調査項目から「座高」、健康状態調査項目から「寄生虫卵保有の有無」を削除

II 調査結果の概要

第1 発育状態

身長及び体重の本県平均値と全国平均値を年齢別にみると、表1、表2及び図1から図4のとおりである。

1 身長

男子の身長は、5歳から8歳、10歳、12歳、13歳及び16歳の各年齢で前年度より伸びている。

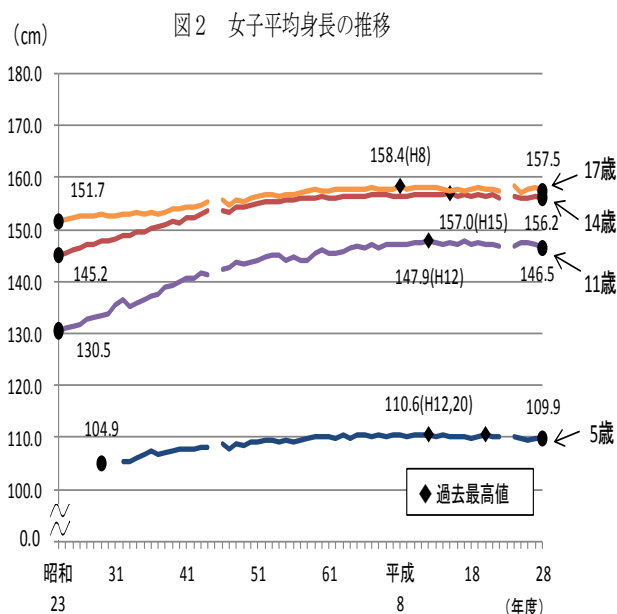
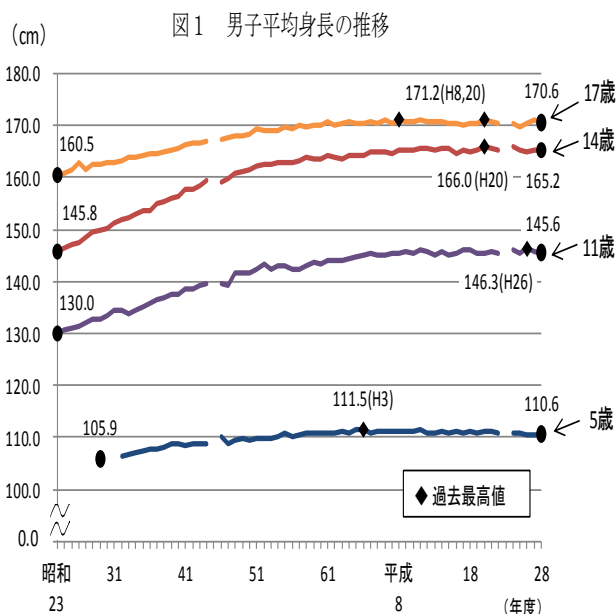
女子は、5歳、8歳、12歳及び13歳の各年齢で前年度より伸びている。

また、10歳及び11歳では、女子が男子を上回っている。

全国との比較でみると、男子は5歳から8歳、10歳から13歳及び16歳の各年齢で、女子は5歳から9歳、12歳及び13歳の各年齢で、全国平均を上回っている。(表1)

表1 年齢別 身長の平均値 (単位: cm)

区分		本県						全国		本県と全国との差	
		男			女			男	女	男	女
		H28 (A)	H27 (B)	前年差 (A-B)	H28 (C)	H27 (D)	前年差 (C-D)	H28 (E)	H28 (F)	(A-E)	(C-F)
幼稚園	5歳	110.6	110.5	0.1	109.9	109.7	0.2	110.4	109.4	0.2	0.5
	6歳	116.8	116.7	0.1	116.0	116.0	0.0	116.5	115.6	0.3	0.4
小学校	7歳	122.7	122.2	0.5	121.6	121.8	△ 0.2	122.5	121.5	0.2	0.1
	8歳	128.7	128.3	0.4	127.6	127.1	0.5	128.1	127.2	0.6	0.4
	9歳	133.6	133.7	△ 0.1	133.5	133.5	0.0	133.6	133.4	0.0	0.1
	10歳	139.9	139.0	0.9	140.1	140.5	△ 0.4	138.8	140.2	1.1	△ 0.1
	11歳	145.6	145.7	△ 0.1	146.5	147.2	△ 0.7	145.2	146.8	0.4	△ 0.3
中学校	12歳	153.7	153.0	0.7	152.0	151.8	0.2	152.7	151.9	1.0	0.1
	13歳	160.7	159.5	1.2	155.1	154.8	0.3	159.9	154.8	0.8	0.3
	14歳	165.2	165.3	△ 0.1	156.2	156.5	△ 0.3	165.2	156.5	0.0	△ 0.3
高等学校	15歳	168.2	168.5	△ 0.3	156.5	156.8	△ 0.3	168.3	157.1	△ 0.1	△ 0.6
	16歳	170.0	169.5	0.5	157.0	157.1	△ 0.1	169.9	157.5	0.1	△ 0.5
	17歳	170.6	171.0	△ 0.4	157.5	158.0	△ 0.5	170.7	157.8	△ 0.1	△ 0.3



2 体重

男子の体重は、5歳、7歳、8歳、10歳、12歳及び13歳の各年齢で前年度より増えており、8歳(29.0kg)は過去最高となっている。

女子は、5歳から9歳、11歳、12歳及び15歳の各年齢で前年度より増えている。

また、11歳では、女子が男子を上回っている。

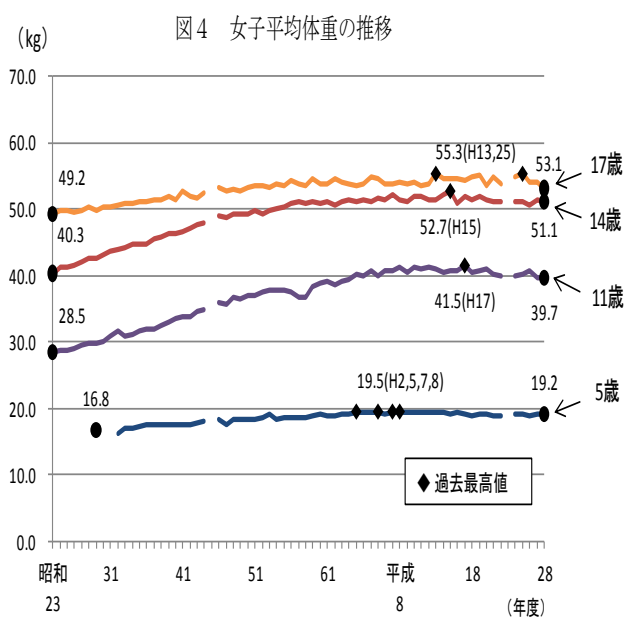
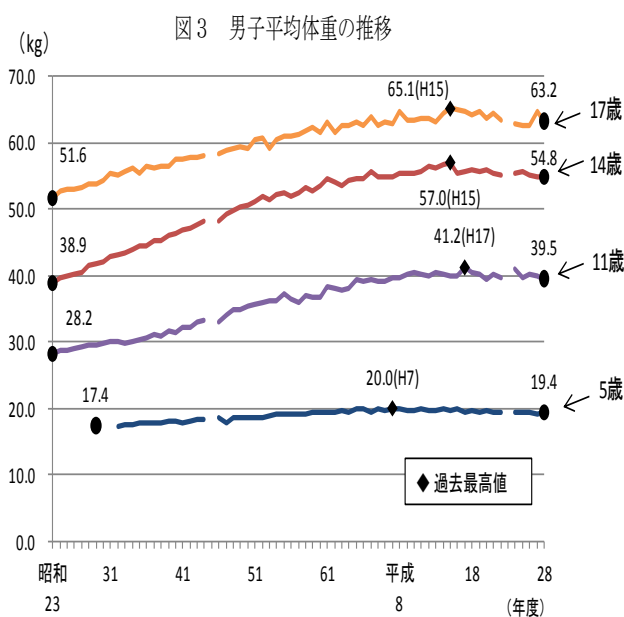
全国との比較でみると、男子、女子ともにすべての年齢で全国平均を上回っている。

(表2)

表2 年齢別 体重の平均値

区分	(単位: kg)										
	本県						全国		本県と全国との差		
	男			女			男	女	男	女	
	H28 (A)	H27 (B)	前年差 (A-B)	H28 (C)	H27 (D)	前年差 (C-D)	H28 (E)	H28 (F)	(A-E)	(C-F)	
幼稚園	5歳	19.4	19.2	0.2	19.2	19.1	0.1	18.9	18.5	0.5	0.7
小学校	6歳	21.8	21.9	△ 0.1	21.5	21.4	0.1	21.4	20.9	0.4	0.6
	7歳	24.8	24.2	0.6	23.8	23.7	0.1	24.0	23.5	0.8	0.3
	8歳	<u>29.0</u>	27.7	1.3	26.9	26.5	0.4	27.2	26.4	1.8	0.5
	9歳	31.1	31.9	△ 0.8	30.9	30.4	0.5	30.6	29.8	0.5	1.1
	10歳	36.2	34.8	1.4	35.3	35.6	△ 0.3	34.0	34.0	2.2	1.3
中学校	11歳	39.5	39.9	△ 0.4	39.7	39.6	0.1	38.4	39.0	1.1	0.7
	12歳	46.2	44.7	1.5	44.9	44.8	0.1	44.0	43.7	2.2	1.2
	13歳	50.5	49.8	0.7	48.3	48.6	△ 0.3	48.8	47.2	1.7	1.1
高等学校	14歳	54.8	54.9	△ 0.1	51.1	51.4	△ 0.3	53.9	50.0	0.9	1.1
	15歳	60.2	61.6	△ 1.4	52.2	52.1	0.1	58.7	51.7	1.5	0.5
	16歳	61.6	62.2	△ 0.6	53.2	53.4	△ 0.2	60.5	52.6	1.1	0.6
	17歳	63.2	64.6	△ 1.4	53.1	54.1	△ 1.0	62.5	52.9	0.7	0.2

(注) 下線の部分は調査実施以来最高値を示す。



※ 昭和 45 年度は標本数が少なく、本県の数値は公表していない。

3 身長及び体重の推移

(1) 身長の推移

ア 男子

(ア) 各年齢間の身長差は、11歳と12歳の間(8.1cm)が最も大きく、16歳と17歳の間(0.6cm)が最も小さい。(表3)

(イ) 今年度の身長を親の世代(30年前・昭和61年度調査)と比べると、最も差のある年齢は12歳で、親の世代より3.5cm高い。(表3)

(ロ) 平成10年度生まれ(今年度調査時17歳)と30年前の昭和43年度生まれ(親の世代)の発育量を比べると、年間発育量が最大となる時期は、それぞれの世代で12歳(平成10年度生まれが7.2cm、親の世代が7.6cm)を示している。

なお、現在の17歳は、5歳、6歳及び10歳の各歳時において、親の世代の発育量を上回っている。(表4)

イ 女子

(ア) 各年齢間の身長差は、9歳と10歳の間(6.6cm)が最も大きく、14歳と15歳の間(0.3cm)が最も小さい。(表3)

(イ) 今年度の身長を親の世代(30年前・昭和61年度調査)と比べると、最も差のある年齢は11歳で、親の世代より1.0cm高い。(表3)

(ロ) 平成10年度生まれ(今年度調査時17歳)と30年前の昭和43年度生まれ(親の世代)の発育量を比べると、年間発育量が最大となる時期は、平成10年度生まれが9歳(7.0cm)、親の世代が10歳(6.5cm)を示している。

なお、現在の17歳は、5歳、6歳、8歳、9歳及び14歳の各歳時において親の世代の発育量を上回っている。(表4)

表3 身長の年齢別平均値

(単位：cm)

区 分			H 2 8 (A)	年齢間の 身長差	H 2 7 (B)	前年差 (A - B)	S 6 1 親の世代(C)	差 (A - C)
男 子	幼稚園	5歳	110.6		110.5	0.1	110.8	△ 0.2
		小学校	6歳	116.8	6.2	116.7	0.1	116.6
	7歳		122.7	5.9	122.2	0.5	122.6	0.1
	8歳		128.7	6.0	128.3	0.4	128.0	0.7
	9歳		133.6	4.9	133.7	△ 0.1	132.6	1.0
	10歳		139.9	6.3	139.0	0.9	138.2	1.7
	11歳		145.6	5.7	145.7	△ 0.1	144.1	1.5
	中学校		12歳	153.7	<u>8.1</u>	153.0	0.7	150.2
		13歳	160.7	7.0	159.5	1.2	157.3	3.4
		14歳	165.2	4.5	165.3	△ 0.1	164.2	1.0
	高等学校	15歳	168.2	3.0	168.5	△ 0.3	167.6	0.6
		16歳	170.0	1.8	169.5	0.5	169.1	0.9
		17歳	170.6	0.6	171.0	△ 0.4	170.7	△ 0.1
	女 子	幼稚園	5歳	109.9		109.7	0.2	110.1
小学校			6歳	116.0	6.1	116.0	0.0	115.5
		7歳	121.6	5.6	121.8	△ 0.2	121.4	0.2
		8歳	127.6	6.0	127.1	0.5	127.3	0.3
		9歳	133.5	5.9	133.5	0.0	132.7	0.8
		10歳	140.1	<u>6.6</u>	140.5	△ 0.4	139.3	0.8
		11歳	146.5	6.4	147.2	△ 0.7	145.5	1.0
		中学校	12歳	152.0	5.5	151.8	0.2	151.2
13歳			155.1	3.1	154.8	0.3	154.4	0.7
14歳			156.2	1.1	156.5	△ 0.3	156.2	0.0
高等学校		15歳	156.5	0.3	156.8	△ 0.3	157.3	△ 0.8
		16歳	157.0	0.5	157.1	△ 0.1	157.4	△ 0.4
		17歳	157.5	0.5	158.0	△ 0.5	157.5	0.0

(注) 下線の部分は年齢間の差が最も大きい値を示す。

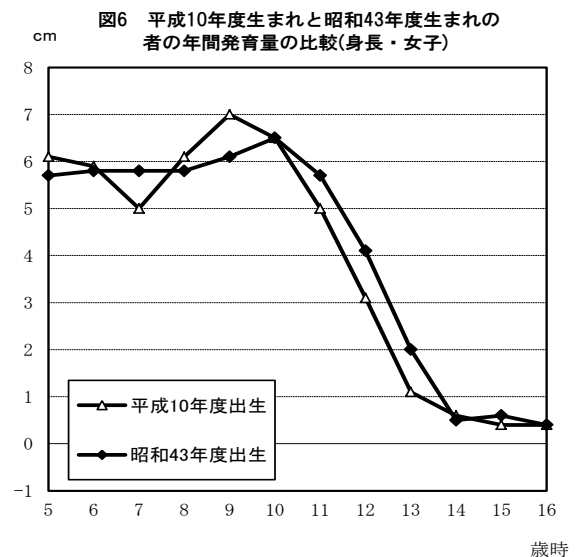
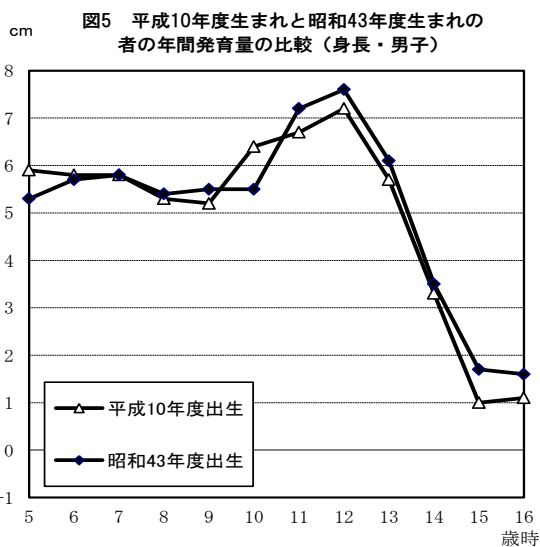
表4 平成10年度生まれと昭和43年度生まれの者の年間発育量の比較（身長）（単位：cm）

区 分	男 子		女 子		
	平成10年度生まれ (平成28年度17歳)	昭和43年度生まれ (昭和61年度17歳)	平成10年度生まれ (平成28年度17歳)	昭和43年度生まれ (昭和61年度17歳)	
総 発 育 量	59.4	60.9	47.2	49.0	
幼稚園 5 歳時	5.9	5.3	6.1	5.7	
小学校	6 歳時	5.8	5.7	5.9	5.8
	7 歳時	5.8	5.8	5.0	5.8
	8 歳時	5.3	5.4	6.1	5.8
	9 歳時	5.2	5.5	<u>7.0</u>	6.1
	10 歳時	6.4	5.5	6.5	<u>6.5</u>
11 歳時	6.7	7.2	5.0	5.7	
中学校	12 歳時	<u>7.2</u>	<u>7.6</u>	3.1	4.1
	13 歳時	5.7	6.1	1.1	2.0
	14 歳時	3.3	3.5	0.6	0.5
高等学校	15 歳時	1.0	1.7	0.4	0.6
	16 歳時	1.1	1.6	0.4	0.4

(注) 1 年間発育量とは、例えば、平成10年度生まれの「5歳時」の年間発育量は、平成17年度調査6歳の数値から平成16年度調査5歳の数値を減じたものである。

2 下線の部分は、最大の年間発育量を示す。

3 平成10年度生まれの12歳の数値は全国値によるもの（平成23年度調査が東日本大震災により岩手県、宮城県、福島県は実施しなかったため。）



(2) 体重の推移

ア 男子

(ア) 各年齢間の体重差は、11歳と12歳の間(6.7 kg)が最も大きく、15歳と16歳の間(1.4 kg)が最も小さい。(表5)

(イ) 今年度の体重を親の世代(30年前・昭和61年度調査)と比べると、最も差のある年齢は12歳で、親の世代より4.1 kg重い。(表5)

(ウ) 平成10年度生まれ(今年度調査時17歳)と30年前の昭和43年度生まれ(親の世代)の発育量を比べると、年間発育量が最大となる時期は、平成10年度生まれが12歳(6.3 kg)、親の世代が13歳(6.0 kg)を示している。

なお、現在の17歳は、5歳、7歳、8歳、10歳、12歳、14歳及び15歳の各歳時において親の世代の発育量を上回っている。(表6)

イ 女子

(ア) 各年齢間の体重差は、11歳と12歳の間(5.2 kg)が最も大きく、16歳と17歳の間(0.1 kg)が最も小さい。(表5)

(イ) 今年度の体重を親の世代(30年前・昭和61年度調査)と比べると、最も差のある年齢は10歳で、親の世代より1.5 kg重い。(表5)

(ウ) 平成10年度生まれ(今年度調査時17歳)と30年前の昭和43年度生まれ(親の世代)の発育量を比べると、年間発育量が最大となる時期は、それぞれの世代で10歳(平成10年度生まれが5.0 kg、親の世代が5.2 kg)を示している。

なお、現在の17歳は、5歳、6歳、8歳、9歳及び15歳の各歳時において親の世代の発育量を上回っている。(表6)

表5 体重の年齢別平均値 (単位: kg)

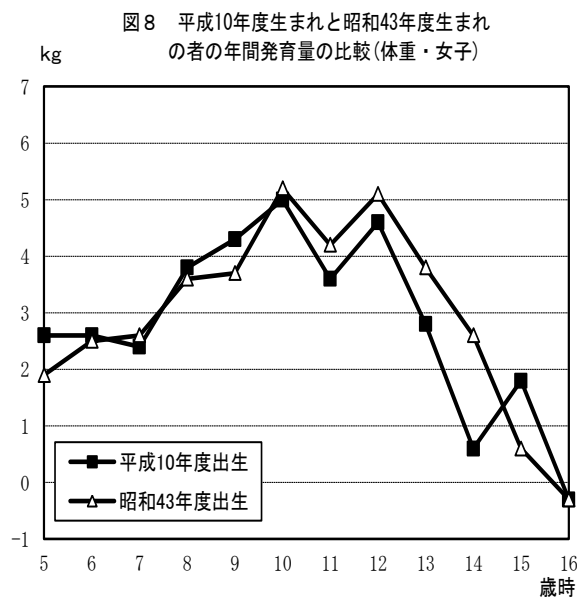
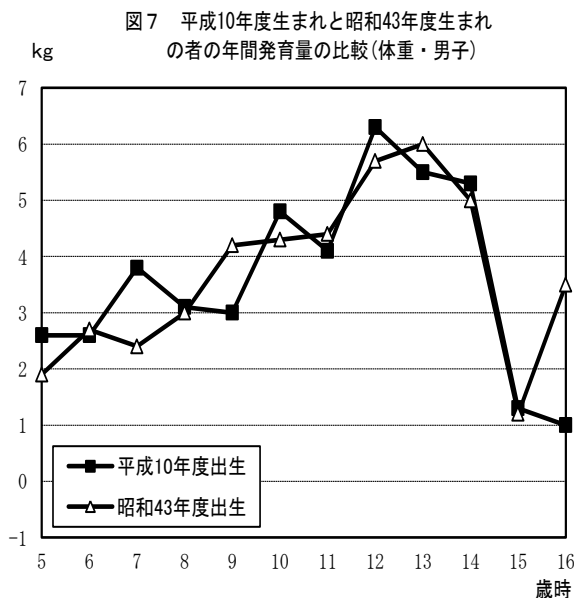
区 分		H28 (A)	年齢間の 体重差	H27 (B)	前年差 (A-B)	S 61 親の世代(C)	差 (A-C)	
男 子	幼稚園	5歳	19.4		19.2	0.2	19.5	△ 0.1
		6歳	21.8	2.4	21.9	△ 0.1	21.5	0.3
	小学校	7歳	24.8	3.0	24.2	0.6	24.0	0.8
		8歳	29.0	4.2	27.7	1.3	27.4	1.6
		9歳	31.1	2.1	31.9	△ 0.8	29.4	1.7
		10歳	36.2	5.1	34.8	1.4	33.7	2.5
		11歳	39.5	3.3	39.9	△ 0.4	38.3	1.2
	中学校	12歳	46.2	<u>6.7</u>	44.7	1.5	42.1	4.1
		13歳	50.5	4.3	49.8	0.7	48.2	2.3
		14歳	54.8	4.3	54.9	△ 0.1	54.6	0.2
	高等学校	15歳	60.2	5.4	61.6	△ 1.4	58.9	1.3
		16歳	61.6	1.4	62.2	△ 0.6	61.2	0.4
		17歳	63.2	1.6	64.6	△ 1.4	63.0	0.2
	女 子	幼稚園	5歳	19.2		19.1	0.1	18.9
6歳			21.5	2.3	21.4	0.1	21.1	0.4
小学校		7歳	23.8	2.3	23.7	0.1	23.7	0.1
		8歳	26.9	3.1	26.5	0.4	26.8	0.1
		9歳	30.9	4.0	30.4	0.5	29.6	1.3
		10歳	35.3	4.4	35.6	△ 0.3	33.8	1.5
		11歳	39.7	4.4	39.6	0.1	39.0	0.7
中学校		12歳	44.9	<u>5.2</u>	44.8	0.1	44.1	0.8
		13歳	48.3	3.4	48.6	△ 0.3	48.3	0.0
		14歳	51.1	2.8	51.4	△ 0.3	51.1	0.0
高等学校		15歳	52.2	1.1	52.1	0.1	52.9	△ 0.7
		16歳	53.2	1.0	53.4	△ 0.2	54.4	△ 1.2
		17歳	53.1	0.1	54.1	△ 1.0	53.7	△ 0.6

(注) 下線の部分は年齢間の差が最も大きい値を示す。

表6 平成10年度生まれと昭和43年度生まれの者の年間発育量の比較(体重) (単位: kg)

区 分	男 子		女 子		
	平成10年度生まれ (平成28年度17歳)	昭和43年度生まれ (昭和61年度17歳)	平成10年度生まれ (平成28年度17歳)	昭和43年度生まれ (昭和61年度17歳)	
総 発 育 量	43.4	44.3	33.8	35.5	
幼稚園 5 歳時	2.6	1.9	2.6	1.9	
小学校	6 歳時	2.6	2.7	2.6	2.5
	7 歳時	3.8	2.4	2.4	2.6
	8 歳時	3.1	3.0	3.8	3.6
	9 歳時	3.0	4.2	4.3	3.7
	10 歳時	4.8	4.3	<u>5.0</u>	<u>5.2</u>
中学校	11 歳時	4.1	4.4	3.6	4.2
	12 歳時	<u>6.3</u>	5.7	4.6	5.1
	13 歳時	5.5	<u>6.0</u>	2.8	3.8
高等学校	14 歳時	5.3	5.0	0.6	2.6
	15 歳時	1.3	1.2	1.8	0.6
	16 歳時	1.0	3.5	△ 0.3	△ 0.3

(注) 1 年間発育量とは、例えば、平成10年度生まれの「5歳時」の年間発育量は、平成17年度調査6歳の数値から平成16年度調査5歳の数値を減じたものである。
 2 下線の部分は、最大の年間発育量を示す。
 3 平成10年度生まれの12歳の数値は全国値によるもの(平成23年度調査が東日本大震災により岩手県、宮城県、福島県は実施しなかったため。)



第2 健康状態

1 疾病・異常の被患率等別状況

疾病・異常の被患率等を階層別にみると、表7のとおりである。

幼稚園及び小学校で被患率等が最も高いのは、むし歯で、幼稚園 47.9%、小学校 61.5%となっている。

中学校及び高等学校で被患率等が最も高いのは、裸眼視力1.0未満の者で、中学校 60.9%、高等学校 67.9%となっている。

表7 疾病・異常の被患率等

(単位：%)

区分	幼稚園	小学校	中学校	高等学校	
60～		むし歯 61.5	裸眼視力1.0未満の者 60.9	裸眼視力1.0未満の者 67.9	
40～60	むし歯 47.9		むし歯 48.5	むし歯 58.3	
20～40		裸眼視力1.0未満の者 37.0			
10～20		鼻・副鼻腔疾患 15.0			
1～10	8～10	歯・口腔のその他の疾病・異常 8.0	鼻・副鼻腔疾患 8.0		
	6～8		耳疾患 7.4		
	4～6		その他の疾病・異常 5.0	耳疾患 5.8	鼻・副鼻腔疾患 4.9
			歯列・咬合 4.9	歯・口腔のその他の疾病・異常 5.3	歯列・咬合 4.3
				歯肉の状態 5.0	
				心電図異常 4.6	
				その他の疾病・異常 4.5	
	2～4		歯列・咬合 4.1	歯肉の状態 4.0	
		歯垢の状態 2.7	アトピー性皮膚炎 3.6	せき柱・胸部・四肢 3.2	歯垢の状態 3.8
		耳疾患 2.4	眼の疾病・異常 3.5	アトピー性皮膚炎 2.4	心電図異常 3.4
その他の皮膚疾患 2.4		心電図異常 3.1	眼の疾病・異常 2.2	歯肉の状態 2.9	
		ぜん息 3.1	蛋白検出の者 2.1	せき柱・胸部・四肢 2.8	
1～2		栄養状態 3.0		蛋白検出の者 2.4	
		歯垢の状態 2.1			
		せき柱・胸部・四肢 2.1			
	その他の疾病・異常 1.9	口腔咽喉頭疾患・異常 1.7	ぜん息 1.5	アトピー性皮膚炎 1.8	
	口腔咽喉頭疾患・異常 1.7	歯肉の状態 1.3	栄養状態 1.4	その他の疾病・異常 1.8	
歯列・咬合 1.6	その他の皮膚疾患 1.0		歯・口腔のその他の疾病・異常 1.2		
歯・口腔のその他の疾病・異常 1.6			ぜん息 1.2		
アトピー性皮膚炎 1.6					
ぜん息 1.5					
鼻・副鼻腔疾患 1.1					
0.1～1	0.5～1		難聴 0.5	眼の疾病・異常 0.6	
			その他の皮膚疾患 0.5	顎関節 0.5	
	0.1～0.5	せき柱・胸部・四肢 0.4	心臓の疾病・異常 0.4	心臓の疾病・異常 0.4	難聴 0.2
		栄養状態 0.3	蛋白検出の者 0.3	口腔咽喉頭疾患・異常 0.3	その他の皮膚疾患 0.2
		歯肉の状態 0.2	言語障害 0.3	難聴 0.2	尿糖検出の者 0.2
		言語障害 0.2	腎臓疾患 0.2	顎関節 0.2	腎臓疾患 0.2
		眼の疾病・異常 0.1	顎関節 0.1	言語障害 0.2	耳疾患 0.1
		蛋白検出の者 0.1		尿糖検出の者 0.1	口腔咽喉頭疾患・異常 0.1
		腎臓疾患 0.1		腎臓疾患 0.1	栄養状態 0.1
					心臓の疾病・異常 0.1
～0.1	心臓の疾病・異常 0.0	結核精密検査の対象者 0.0	結核精密検査の対象者 0.0	言語障害 0.0	
	尿糖検出の者 0.0				

(注) 1 「眼の疾病・異常」とは、トラコーマ、流行性角結膜炎、麦粒腫(ものもらい)、眼炎、斜視、片眼失明等である。

2 「耳疾患」とは、中耳炎、内耳炎、外耳炎、メニエール病、耳かいの欠損、耳垢栓塞等である。

3 「鼻・副鼻腔疾患」とは、慢性副鼻腔炎(蓄のう症)、慢性的症状の鼻炎、鼻ポリープ、アレルギー性鼻炎(花粉症等)等である。

4 「歯・口腔のその他の疾病・異常」とは、口角炎、口唇炎、口内炎、唇裂、口蓋裂、舌小帯異常等である。

5 「心電図異常」とは、心電図検査の結果、異常と判定された者である。

6 「その他の疾病・異常」とは、本調査のいずれの調査項目にも該当しない疾病・異常(例えば、てんかん、貧血、川崎病等)である。

7 「結核精密検査の対象者」とは、学校医の診察等または結核対策委員会での検討の結果、精密検査の対象となった者である。

2 主な疾病・異常の推移

主な疾病・異常の近年の推移は、表8のとおりである。

(1) 裸眼視力1.0未満の者

前年度との比較でみると、小学校及び中学校で増加している。

全国との比較でみると、小学校、中学校及び高等学校で割合を上回っている。

(2) むし歯

前年度との比較でみると、小学校及び高等学校は減少しているが、幼稚園及び中学校では増加している。

全国との比較でみると、幼稚園から高等学校まで割合を上回っている。

(3) 鼻・副鼻腔疾患

前年度との比較でみると、幼稚園及び中学校は減少しているが、小学校及び高等学校では増加している。

全国との比較でみると、小学校で割合を上回っている。

表8 主な疾病・異常の推移

(単位：%)

区分		裸眼視力 1.0 未満の者	むし 歯	鼻・ 副 鼻 腔 疾 患	心 電 図 異 常	せ き 柱 の 状 態 ・ 胸 郭 ・ 四 肢	蛋 白 検 出 の 者	ア ト ピ ー 性 皮 膚 炎	ぜん 息	耳 疾 患	口 腔 咽 喉 頭 疾 患 ・ 異 常
幼 稚 園	H18	X	68.8	1.0	…	(0.1)	0.2	2.7	2.4	0.7	1.1
	22	X	57.4	1.9	…	(-)	0.1	2.5	1.1	4.3	0.8
	24	X	52.6	1.3	…	(0.4)	0.5	2.6	1.2	3.9	2.7
	25	X	51.6	3.6	…	(0.2)	0.4	2.1	1.8	7.0	0.4
	26	X	50.0	-	…	(-)	0.4	2.0	2.7	1.9	1.8
	27	X	42.3	1.4	…	(-)	0.3	2.5	1.1	0.8	1.5
	28	X	47.9	1.1	…	0.4	0.1	1.6	1.5	2.4	1.7
	全国H28		27.9	35.6	3.6	…	0.3	0.7	2.4	2.3	2.8
小 学 校	H18	29.9	76.3	8.0	1.9	(0.3)	0.4	3.1	2.9	4.0	2.1
	22	31.2	68.1	12.8	2.9	(0.3)	0.5	3.4	2.7	6.9	3.1
	24	34.8	67.5	9.4	2.1	(0.1)	0.4	3.0	6.0	4.5	1.7
	25	36.1	67.0	15.9	2.6	(0.2)	0.2	3.1	4.0	7.7	2.1
	26	35.2	66.3	13.3	3.1	(0.2)	0.9	3.5	4.3	4.9	4.0
	27	35.2	61.8	9.8	2.5	(0.2)	0.5	3.0	3.7	5.7	2.5
	28	37.0	61.5	15.0	3.1	2.1	0.3	3.6	3.1	7.4	1.7
	全国H28		31.5	48.9	12.9	2.4	1.8	0.8	3.2	3.7	6.1
中 学 校	H18	49.8	67.7	6.5	2.5	(0.4)	0.8	2.6	1.9	1.3	1.2
	22	59.6	61.3	9.8	2.8	(0.4)	1.3	2.5	3.1	4.8	0.3
	24	56.6	54.7	9.5	3.3	(0.3)	1.4	2.2	2.4	4.9	0.9
	25	59.2	56.8	8.1	3.5	(0.4)	1.2	2.2	1.8	2.3	1.8
	26	55.4	49.4	7.5	3.0	(0.8)	1.3	2.1	2.4	3.0	0.9
	27	58.4	47.5	11.8	4.1	(0.3)	2.1	3.1	3.7	2.8	1.4
	28	60.9	48.5	8.0	4.6	3.2	2.1	2.4	1.5	5.8	0.3
	全国H28		54.6	37.5	11.5	3.3	3.4	2.6	2.7	2.9	4.5
高 等 学 校	H18	X	75.3	8.0	3.3	(0.4)	1.3	2.1	1.2	0.5	1.1
	22	X	67.6	0.0	3.9	(0.1)	1.6	1.1	0.7	0.1	0.9
	24	X	62.9	1.9	3.1	(0.2)	1.2	1.3	1.3	0.1	0.4
	25	68.6	65.7	0.2	3.5	(0.4)	0.9	0.7	0.6	0.2	0.0
	26	42.2	61.7	1.5	3.8	(0.1)	1.0	1.0	1.3	0.0	0.2
	27	-	59.2	0.6	3.9	(0.1)	1.6	1.6	1.1	0.3	0.4
	28	67.9	58.3	4.9	3.4	2.8	2.4	1.8	1.2	0.1	0.1
	全国H28		66.0	49.2	9.4	3.4	2.5	3.3	2.3	1.9	2.3

(注) 1 小数点以下第2位を四捨五入している。

2 心電図異常については、6歳、12歳、15歳のみ調査を実施している。

3 アトピー性皮膚炎については、平成18年度から調査を実施している。

4 「せき柱・胸郭・四肢の状態」については平成27年度までは「せき柱・胸郭」のみを調査。

3 裸眼視力 1.0 未満の者の推移

(1) 裸眼視力 1.0 未満の者の割合は、表 9 のとおりである。

前年度との比較でみると、小学校で 1.8 ポイント、中学校で 2.5 ポイント増加している。

10 年前(平成 18 年度)との比較でみると、小学校で 7.1 ポイント、中学校で 11.1 ポイント増加している。

また、全国との比較でみると、小学校、中学校及び高等学校で全国の割合を上回っている。

(2) 視力非矯正者(眼鏡やコンタクトレンズを使用していない者)と視力矯正者とに分けて調査したところ、視力非矯正者のうち、「裸眼視力 0.7 未満の者」(学校生活上問題となることが多い視力の状態の者)の割合は、小学校で 13.6%、中学校で 19.0%、高等学校で 14.5%となっている。(表 10)

表 9 裸眼視力1.0未満の者の推移

(単位：%)

区 分		H18	H22	H24	H25	H26	H27 (A)	H28 (B)	前年差 (B-A)	全国H28 (C)	差 (B-C)
幼稚園	計	X	X	X	X	X	X	X	-	27.9	-
	1.0未満 0.7以上	X	X	X	X	X	X	X	-	20.0	-
	0.7未満 0.3以上	X	X	X	X	X	X	X	-	7.1	-
	0.3未満	X	X	X	X	X	X	X	-	0.9	-
小学校	計	29.9	31.2	34.8	36.1	35.2	35.2	37.0	1.8	31.5	5.5
	1.0未満 0.7以上	11.7	11.3	12.8	14.0	13.7	12.6	13.7	1.1	11.2	2.5
	0.7未満 0.3以上	11.7	12.3	12.6	12.9	12.6	13.5	12.6	△ 0.9	11.7	0.9
	0.3未満	6.4	7.6	9.4	9.2	8.8	9.2	10.6	1.4	8.6	2.0
中学校	計	49.8	59.6	56.6	59.2	55.4	58.4	60.9	2.5	54.6	6.3
	1.0未満 0.7以上	13.0	12.9	10.1	10.7	12.4	10.6	12.3	1.7	11.5	0.8
	0.7未満 0.3以上	18.5	18.8	16.5	18.1	18.4	17.4	19.8	2.4	16.4	3.4
	0.3未満	18.3	27.9	30.0	30.4	24.6	30.4	28.9	△ 1.5	26.7	2.2
高等学校	計	X	X	X	68.6	42.2	-	67.9	-	66.0	1.9
	1.0未満 0.7以上	X	X	X	X	14.7	-	7.2	-	11.8	△ 4.6
	0.7未満 0.3以上	X	X	X	X	18.5	-	19.1	-	16.6	2.5
	0.3未満	X	X	X	X	9.0	-	41.6	-	37.6	4.0

(注) 1 小数点以下第2位四捨五入により、計と内訳が一致しない場合がある。

(注) 2 両眼で視力が異なる場合は、低い方の視力の記載により計上している。

図9 裸眼視力1.0未満の者の推移

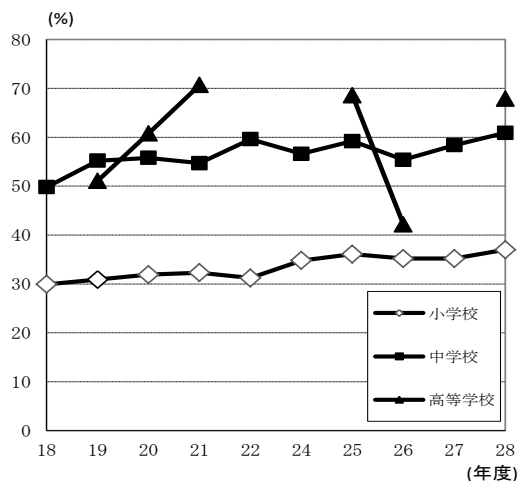


図10 学校種別裸眼視力1.0未満の者の割合

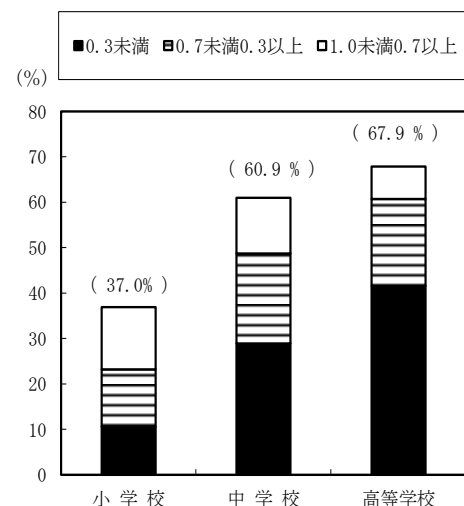


表 10 学校種別 視力非矯正者と視力矯正者の割合

(単位：%)

区分		視力非矯正者の裸眼視力					視力矯正者の裸眼視力				
		1.0以上	1.0未満 0.7以上	0.7未満 0.3以上	0.3未満		1.0以上	1.0未満 0.7以上	0.7未満 0.3以上	0.3未満	
幼稚園	H28	X	X	X	X	X	X	X	X	X	X
	全国	98.8	71.8	19.7	6.7	0.6	1.2	0.3	0.3	0.4	0.3
小学校	H28	88.8	62.4	12.8	9.8	3.8	11.1	0.6	0.9	2.8	6.8
	全国	91.2	67.9	10.3	9.3	3.7	8.9	0.7	0.9	2.4	5.0
中学校	H28	68.2	38.1	11.1	12.2	6.8	31.8	1.0	1.2	7.5	22.1
	全国	74.2	44.8	10.5	11.5	7.4	25.8	0.6	1.0	5.0	19.3
高等学校	H28	53.4	31.9	7.0	7.6	6.9	46.6	0.2	0.2	11.5	34.7
	全国	64.3	33.4	11.1	12.0	7.8	35.7	0.6	0.8	4.6	29.8

(注) 1 小数点以下第2位四捨五入により、計と内訳が一致しない場合がある。

(注) 2 両眼で視力が異なる場合は、低い方の視力の記載により計上している。

4 むし歯の推移

むし歯を「処置完了者」と「未処置歯のある者」に区分すると表 11 のとおりである。

むし歯の被患率(治療済みの者を含む。)は、幼稚園で 47.9%、小学校で 61.5%、中学校で 48.5%、高等学校では 58.3%となっている。30 年前(昭和 61 年度)はすべての区分で 8 割を超え、20 年前(平成 8 年度)も 30 年前と同程度の水準であったが、近年は低下傾向にある。

また、全国との比較でみると、すべての学校(園)で割合を上回っている。

表 11 むし歯被患率の推移

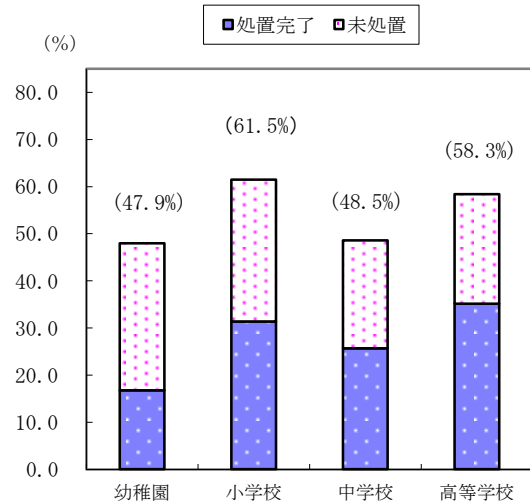
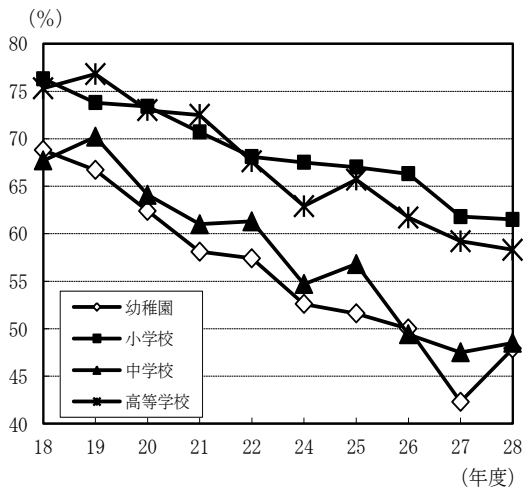
(単位：%)

区 分		S61	H8	H18	H22	H24	H25	H26	H27 (A)	H28 (B)	差 (B-A)	全国H28 (C)	差 (B-C)
幼 稚 園	計	88.7	83.0	68.8	57.4	52.6	51.6	50.0	42.3	47.9	5.6	35.6	12.3
	処置完了者	19.1	24.8	24.7	21.0	14.9	20.6	16.8	18.4	16.7	△ 1.7	14.5	2.2
	未処置歯のある者	69.6	58.1	44.1	36.4	37.7	31.1	33.2	23.9	31.2	7.3	21.1	10.1
小 学 校	計	94.1	90.2	76.3	68.1	67.5	67.0	66.3	61.8	61.5	△ 0.3	48.9	12.6
	処置完了者	31.7	40.9	36.3	32.5	32.6	32.4	31.8	32.3	31.3	△ 1.0	24.7	6.6
	未処置歯のある者	62.4	49.3	39.9	35.6	35.0	34.6	34.5	29.6	30.1	0.5	24.2	5.9
中 学 校	計	92.6	88.6	67.7	61.3	54.7	56.8	49.4	47.5	48.5	1.0	37.5	11.0
	処置完了者	37.7	48.7	36.0	31.1	26.4	30.5	25.3	22.8	25.6	2.8	21.0	4.6
	未処置歯のある者	54.9	39.9	31.7	30.2	28.3	26.2	24.1	24.6	22.9	△ 1.7	16.5	6.4
高 等 学 校	計	87.3	93.1	75.3	67.6	62.9	65.7	61.7	59.2	58.3	△ 0.9	49.2	9.1
	処置完了者	37.0	49.2	39.7	37.5	34.8	31.5	35.9	34.5	35.1	0.6	28.4	6.8
	未処置歯のある者	50.4	43.9	35.5	30.1	28.0	34.2	25.8	24.7	23.2	△ 1.5	20.8	2.4

(注) 差の欄については、小数点以下第2位四捨五入により、掲載上の計算値と一致しない箇所がある。

図12 むし歯の処理状況

図11 むし歯被患率の推移グラフ



5 12歳の永久歯の一人当たり平均むし歯等数の推移

12歳の永久歯の一人当たり平均むし歯等数(喪失歯及びむし歯数)は、表12のとおりである。

喪失歯数には変化はないが、むし歯数は1.2本で、昭和59年に調査を開始して以来、減少傾向にあり10年前(平成18年)と比較すると0.8本減少している。

また、12歳の永久歯の一人当たり平均むし歯等数は、全国との比較でみると割合を上回っている。(表12)

表12 12歳の永久歯の一人当たり平均むし歯等数の推移

区分		H18	H22	H24	H25	H26	H27 (A)	H28 (B)	前年差 (B-A)	全国H28 (C)	差 (B-C)
合計		2.0	1.7	1.5	1.5	1.3	1.2	1.2	0.0	0.8	0.4
喪失歯数		0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0
むし歯	小計	2.0	1.7	1.5	1.5	1.2	1.2	1.2	0.0	0.8	0.4
	処置歯数	1.3	1.0	0.8	0.9	0.8	0.6	0.7	0.1	0.5	0.2
	未処置歯数	0.6	0.6	0.7	0.5	0.5	0.6	0.5	△ 0.1	0.3	0.2

6 鼻・副鼻腔疾患の推移

鼻・副鼻腔疾患(蓄のう症、アレルギー性鼻炎(花粉症等)等の者の割合は、幼稚園で1.1%、小学校で15.0%、中学校で8.0%、高等学校では4.9%となっており、前年度との比較でみると幼稚園及び中学校で減少している。

また、全国との比較でみると、幼稚園、中学校及び高等学校で割合を下回っている。(表13)

表13 鼻・副鼻腔疾患率の推移

区分	幼稚園	小学校	中学校	高等学校
平成18年度	1.0	8.0	6.5	8.0
平成22年度	1.9	12.8	9.8	0.0
平成24年度	1.3	9.4	9.5	1.9
平成25年度	3.6	15.9	8.1	0.2
平成26年度	-	13.3	7.5	1.5
平成27年度(A)	1.4	9.8	11.8	0.6
平成28年度(B)	1.1	15.0	8.0	4.9
増減(B-A)	△ 0.3	5.2	△ 3.8	4.3
平成28年度全国平均(C)	3.6	12.9	11.5	9.4
比較(B-C)	△ 2.5	2.1	△ 3.5	△ 4.5

(注) 差の欄については、小数点以下第2位四捨五入により、掲載上の計算値と一致しない箇所がある。

7 心電図異常の推移(6歳、12歳及び15歳のみ)

心電図異常の者の割合は、小学校で3.1%、中学校で4.6%、高等学校で3.4%となっており、高等学校を除き前年度より増加している。

また、全国との比較でみると、小学校及び中学校で割合を上回っている。(表14)

表14 心電図異常率の推移 (単位：%)

区 分	6歳 (小学校1年)	12歳 (中学校1年)	15歳 (高等学校1年)
平成18年度	1.9	2.5	3.3
平成22年度	2.9	2.8	3.9
平成24年度	2.1	3.3	3.1
平成25年度	2.6	3.5	3.5
平成26年度	3.1	3.0	3.8
平成27年度 (A)	2.5	4.1	3.9
平成28年度 (B)	3.1	4.6	3.4
増減 (B-A)	0.6	0.5	△ 0.5
平成28年度全国平均 (C)	2.4	3.3	3.4
比較 (B-C)	0.7	1.3	0.0

8 ぜん息の推移

ぜん息の者の割合は、幼稚園1.5%、小学校3.1%、中学校1.5%、高等学校1.2%となっており、小学校及び中学校で前年度より減少している。

また、全国との比較でみるとすべての学校で割合を下回っている。(表15)

表15 ぜん息被患率の推移 (単位：%)

区 分	幼稚園	小学校	中学校	高等学校
平成18年度	2.4	2.9	1.9	1.2
平成22年度	1.1	2.7	3.1	0.7
平成24年度	1.2	6.0	2.4	1.3
平成25年度	1.8	4.0	1.8	0.6
平成26年度	2.7	4.3	2.4	1.3
平成27年度 (A)	1.1	3.7	3.7	1.1
平成28年度 (B)	1.5	3.1	1.5	1.2
増減 (B-A)	0.4	△ 0.6	△ 2.2	0.1
平成28年度全国平均 (C)	2.3	3.7	2.9	1.9
比較 (B-C)	△ 0.8	△ 0.6	△ 1.4	△ 0.7

第3 肥満傾向児及び痩身傾向児の出現率

発育状態調査結果から算出した肥満度に基づく、肥満傾向児及び痩身傾向児の出現率を年齢別にみると、表16、表17及び図13から図16のとおりである。

1 肥満傾向児

男子の肥満傾向児の出現率は、7歳、8歳、10歳、12歳、13歳及び16歳の各年齢で前年度より増加しており、10歳が17.99%で最も高くなっている。

女子は、5歳から11歳、14歳及び15歳の各年齢で前年度より増加しており、11歳が14.36%で最も高くなっている。

全国との比較でみると、全ての年齢で全国の割合を上回っている。

(表16、図13、図14)

表16 年齢別 肥満傾向児の出現率

(単位：%)

区分	本県						全国		本県と全国との差		
	男			女			男	女	男	女	
	H28 (A)	H27 (B)	前年差 (A-B)	H28 (C)	H27 (D)	前年差 (C-D)	H28 (E)	H28 (F)	(A-E)	(C-F)	
幼稚園	5歳	3.92	5.29	△ 1.37	6.62	5.96	0.66	2.68	2.44	1.24	4.18
	6歳	5.91	6.97	△ 1.06	8.22	5.91	2.31	4.35	4.24	1.56	3.98
小学校	7歳	10.97	7.05	3.92	6.46	5.20	1.26	5.74	5.18	5.23	1.28
	8歳	15.05	10.36	4.69	8.26	6.46	1.80	7.65	6.63	7.40	1.63
	9歳	12.46	16.22	△ 3.76	11.58	9.21	2.37	9.41	7.17	3.05	4.41
	10歳	17.99	12.83	5.16	12.82	12.69	0.13	10.01	7.86	7.98	4.96
	11歳	12.53	13.39	△ 0.86	14.36	7.51	6.85	10.08	8.31	2.45	6.05
中学校	12歳	16.63	12.49	4.14	11.24	12.54	△ 1.30	10.42	8.57	6.21	2.67
	13歳	11.35	10.50	0.85	9.94	11.74	△ 1.80	8.28	7.46	3.07	2.48
	14歳	10.04	10.81	△ 0.77	11.68	9.93	1.75	8.04	7.70	2.00	3.98
高等学校	15歳	14.57	18.10	△ 3.53	10.48	9.90	0.58	10.95	8.46	3.62	2.02
	16歳	13.91	12.57	1.34	9.45	10.64	△ 1.19	9.43	7.36	4.48	2.09
	17歳	14.13	14.86	△ 0.73	9.15	11.10	△ 1.95	10.64	7.95	3.49	1.20

(注) 肥満傾向児とは、性別・年齢別・身長別標準体重から肥満度を求め、肥満度が20%以上の者である。

$$\text{肥満度} = (\text{実測体重} - \text{身長別標準体重}) / \text{身長別標準体重} \times 100\%$$

図13 肥満傾向児の出現率グラフ(男子)

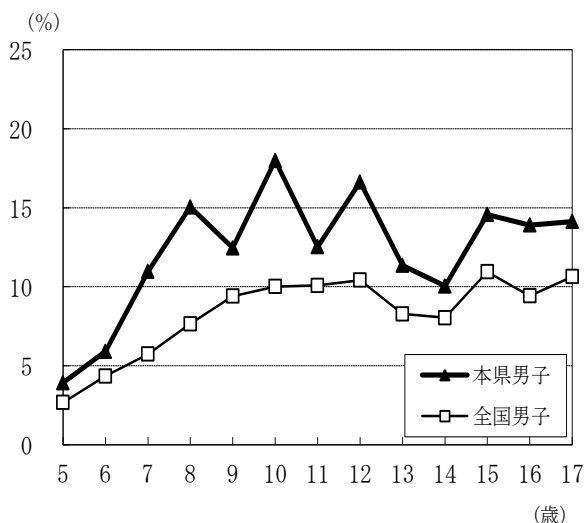
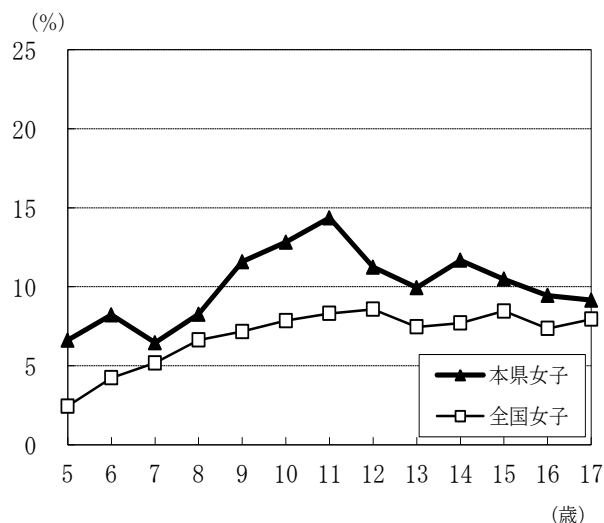


図14 肥満傾向児の出現率グラフ(女子)



2 痩身傾向児

男子の痩身傾向児の出現率は、5歳、9歳から11歳、13歳及び15歳から17歳の各年齢で前年度より増加しており、17歳が2.68%で最も高くなっている。

女子は、8歳、10歳、11歳、14歳及び17歳の各年齢で前年度より増加しており、15歳が3.26%で最も高くなっている。

全国との比較でみると、男子は、5歳、14歳及び17歳で、女子は15歳で全国の割合を上回っている。(表17、図15、図16)

表17 年齢別 痩身傾向児の出現率

(単位：%)

区 分	本県						全国		本県と全国との差		
	男			女			男	女	男	女	
	H28 (A)	H27 (B)	前年差 (A-B)	H28 (C)	H27 (D)	前年差 (C-D)	H28 (E)	H28 (F)	(A-E)	(C-F)	
幼稚園	5歳	1.17	0.21	0.96	0.24	0.40	△ 0.16	0.24	0.44	0.93	△ 0.20
	6歳	0.19	0.24	△ 0.05	0.22	0.61	△ 0.39	0.45	0.40	△ 0.26	△ 0.18
	7歳	-	0.27	△ 0.27	0.56	0.69	△ 0.13	0.41	0.64	△ 0.41	△ 0.08
小学校	8歳	1.03	1.64	△ 0.61	0.99	0.60	0.39	1.16	1.07	△ 0.13	△ 0.08
	9歳	1.15	0.81	0.34	1.52	2.21	△ 0.69	1.48	1.86	△ 0.33	△ 0.34
	10歳	1.69	1.51	0.18	1.77	1.22	0.55	2.49	2.99	△ 0.80	△ 1.22
	11歳	2.17	0.89	1.28	2.73	2.08	0.65	2.94	2.99	△ 0.77	△ 0.26
中学校	12歳	2.55	2.61	△ 0.06	3.13	4.36	△ 1.23	2.75	4.29	△ 0.20	△ 1.16
	13歳	1.17	0.87	0.30	1.55	2.46	△ 0.91	2.04	3.47	△ 0.87	△ 1.92
	14歳	2.10	2.55	△ 0.45	2.52	1.56	0.96	1.84	2.67	0.26	△ 0.15
高等学校	15歳	2.48	1.78	0.70	3.26	3.33	△ 0.07	3.07	2.30	△ 0.59	0.96
	16歳	2.24	1.81	0.43	0.48	1.62	△ 1.14	2.25	1.84	△ 0.01	△ 1.36
	17歳	2.68	1.01	1.67	1.41	0.87	0.54	2.21	1.51	0.47	△ 0.10

(注) 痩身傾向児とは、性別・年齢別・身長別標準体重から肥満度を求め、肥満度が-20%以下の者である。

図15 痩身傾向児の出現率グラフ(男子)

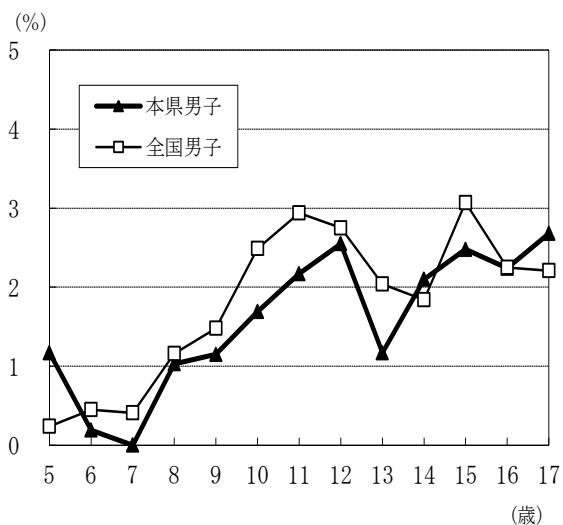


図16 痩身傾向児の出現率グラフ(女子)

